

「フクロウのよろず相談所」

高橋桐矢

カシの木の三番目の枝で、よろず相談所の看板を掲げるフクロウの元に、一羽の若いツグミがやってきました。

「ここに来れば楽になるって友達に聞いて来たんだけど。『よろず相談所』ってここかい」

そう言いながら、若いツグミは辺りをせわしなく見まわしました。フクロウがこたえます。

「はいはい、そうともいいませんな」

ツグミは値踏みするようにフクロウに目を向けました。フクロウは、できるだけ体を丸くしてにつこりとわらいかけました。

「わしはなんのとりえもないただの世話焼きのおじさんですよ。どうぞお気を楽に。さあさあ、こちらにどうぞ」

フクロウは、小さなツグミにちようど良い太さの枝をすすめました。枝に留まったツグミは、ぶるっと羽をふるわせてから、くちばしをかちかちと鳴らしました。

「どうなさったんです。何かお怒りのようですね」

フクロウの問いかけに、ツグミは羽毛をさかだて、さつきより大きくぶるぶると全身をふるわせてもだえました。

「どうもこうもねえよ。おれはもう悔しくて。2年生まれのあいつは俺の鼻先をかすめてゴールしやがった」

ツグミは、仲間のツグミと速飛びで競って負けた話をしました。

語っているうちに、思い出して余計に悔しくなったのか、自分の留まった木の枝を、激しく突き始めました。

フクロウは、ツグミの話を聞き終えて、

「そりゃあ、悔しかったでしょうなあ。ツグミさん。しかし」ふと思い出したようにたずねました。「速飛びなら、もつとずつと速い鳥がいるでしょう。タカはどうです？」

ひゅんと速いタカを見て、それほど悔しく思いますか？」

木の枝を突いていたツグミが、顔を上げました。

「何言ってるんだ。タカはツグミより速いにきまつてんじゃねえか」

「悔しくないんですね？ 同じ鳥なのに」

「タカとツグミは違う。比べても意味がねえ」

「それじゃ、2年生生まれのツグミと、今年生まれのツグミさん、あなたも違うでしょう」  
ツグミは、丸い目をぱちくりとしばたきました。

フクロウは、ちよつとだけ声を低めて言いました。

「今年生まれのツグミさん、あなたは、巣立ったばかりの口の黄色いひよっこツグミよりは速いはずですよ」

「そりゃそうだけど」

小さな羽虫がひらりひらりと二人の間を飛んでいきました。羽虫につられて回した首を、ぐるりともどして、フクロウはこほんと咳をしました。

「あの羽虫よりも、あなたのほうが速いでしょう」

「あんな虫より、おれのほうが何倍も速いさ」

ツグミは胸をふくらませました。

「そうでしょう、そうでしょう。ところであなたよりもわたしよりもずっと速いタカは、こないだここに来てわたしに、夜目がきかなくてちつとも見えないってぼやいていましたよ。暗いところで見ることにかけちゃ、わたしも自信がありますからね。夜ならタカにも勝てるかも」

「知らねえよ、そんなこと」

ふてくされた口調ながら、来たときよりはずいぶんリラックスした様子のツグミに、フクロウは、にっこりとわらいかけました。

「あなたより速い鳥、生きものはたくさんいますよ。だけどあなたより遅い鳥や生きものもたくさんいる。だから、あなたは速いけど、遅い。遅くて速い」

「おれが……遅くて速い？」

フクロウは大きくうなずきました。

「ええ。なんでもそうです。大きいは小さい。小さいは大きい。綺麗は汚い。汚いは綺麗」

一瞬、ツグミのきよとんとしたその顔に、じわじわと不満そうな色が広がっていきました。

「なんだよそれ。ただの気の持ちよう、って話じゃねえか」

「そうともいいます」

「けっ、うそで丸めこもうとしやがって」

「違いますよ」フクロウは首をふって、ぐぐっとツグミに詰め寄りました。「本当のことです。速い遅いも、大きい小さいも、何かと比べてはじめて決まるんです。あなたはミノムシよりは大きい、タカよりは小さい。あなたは大きくて小さい。遅くて速い。」

ウソじゃない。本当のことです」

ツグミの留まった枝のすぐよこで、小さなミノムシが糸の先にぶらさがって、風にゆらゆらゆれています。

ツグミは、ミノムシをちらと見て、うーんと考えこみました。

「てえことは、自分が何かによって、世界も百八十度変わるってことなのか？」  
目を半分閉じて、一生懸命考えています。

「それで、おれが決まれば世界が決まる。とすると逆に世界が、おれが何なのか決めてるっても言えるよな」

「そうですそうです！」

フクロウは何度もうなずきました。

「あなたの周りの世界は、小さなミノムシがゆらゆらゆれていて、あなたよりずっと速いタカがいて、ちよっとだけ速い2年生生まれのツグミがいて、そして仲良しの女の子のツグミが、悩むあなたによろず相談所に行けばいいよってすすめてくれて、だからここに  
いるあなたは、ほかの誰でもないあなたなんです」

木の葉がうなずくようにさや、さやと鳴りました。フクロウは、言葉がツグミの中の  
世界を変えていくのを、じっと待っていました。

ミノムシがゆらゆらゆれて、羽虫がひらりひらりと飛んでいきます。  
しばらくして

「ところでさ」と、ツグミは横を向いたままたずねました。「さつき言ってた、女の子のことだけど。ええと何かほかに言ってたかい」

「ええ、はいはい。あなたのことを心配してましたよ。きっとあれは好きなんでしょうな。間違いありませんよ」

「え？ 女の子が誰を好きだったって？」

「あなたですよ！ ほかのだれでもない、今わたしの目の前にいるあなたです」

フクロウの言葉に、ツグミはクチバシをぱくぱくさせてから、なにやらあわてて、ささと羽つくりをしました。

「まあ、ともかく。おれはおれだ」

「そうですよ」

いつのまにか、ツグミはさっぱりすっきりとした顔をしています。もぞもぞしながら、照れ笑いがこぼれました。

「へへっ。なんだか、うまく言いくるめられたような気もしないでもねえが……まあいいや。とにかく元気が出たよ。ありがとう。フクロウのおじさん。じゃあな」

若いっていいなあ、とフクロウは微笑ましく思いました。

「いいえ、どういたしまして」

若いツグミが、飛んでいった後も、フクロウは、満ち足りた気持ちでじっとしていました。太陽が西に傾き、もうすぐ日が暮れようとしています。

そろそろ店じまいをしようかと思つたそのとき、ばさばさと羽音がして、フクロウの奥さんがやってきました。

「あんた、またこんなところでぐずぐずして。今日のばんごはんを早く捕りに行つてきなさいよ」

奥さんにせかされて、フクロウは、丸い頭を肩にうずめて小さくつぶやきました。

「今行こうと思つてたところなのに……」

奥さんはフクロウをじろりとにらみつけました。

「遅いのよ。あんたなんて、何のとりえもないただのおせっかい。ひがな一日くだらないう講釈たれてるだけでクソの役にも立ちやしないんだからね」

「そこまで言わんでも……」

「人の世話焼いてるひまがあつたら、もう少し早くうちに帰つてこられないの。昨日だつて、ゆっくり話する間もなく寝ちまつて」

「そうかそうか」

フクロウが、ぐるぐると首を回すと、奥さんは、夫を罵倒する悪妻から、夫の帰りが遅くて寂しがる妻に、ぐるっと入れ替わりました。

「分かりましたよ。はいはい」

奥さんはまだ、つんと横を向いています。

「じゃあ、一緒にばんごはんの獲物を取りに行きますか。今日はこれで店じまいです」  
フクロウは、よろず相談所の看板を、くるりと裏返しにしました。

終わり